The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	第二言語としての日本語の受身文の習得研究 一視点に着目して一
Author(s)	李, 偉
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/69643
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　李　偉　　）	
論文題名	第二言語としての日本語の受身文の習得研究 ―視点に着目して―

論文内容の要旨

要旨

1.　研究の背景と目的

本研究は、中国語を母語とする中・上級日本語学習者を対象に、視点に着目して、文脈依存性の高い日本語の受身文の習得実態と関わりのある要因を明らかにしようとした実証研究である。

日本語の受身文を既に学んだ中・上級学習者でも日本語の言語内知識不足による文法上の誤りのほか、「田中さんはテストで悪い点数をとった。成績をお母さんに見せた。お母さんは彼を叱った。（→お母さんに叱られた）」のように文法的には正しいものの、自然な日本語の観点から考えると、それは、受身文の使用による視点の統一が理解されていないためであると考えられる。本稿では、それを学習者の理解レベルと産出レベルから探ろうとするものである。

受身文に関しては、様々な角度から研究されてきている。受身文指導法への視点導入の必要性も多くの研究報告で指摘されてはいるものの、中国の大学で日本語を学習している学習者を想定して、具体的に何をどの時点でどのように導入したら良いのか、そのような角度から進めた、視点に着目した日本語の受身文の習得研究は、管見の限り非常に少ないようである。

2.　研究の内容と方法

上述した問題意識を抱き、目的遂行のために、以下の①日本語中国語双方向の対訳データの調査、②質問紙調査（理解レベルを測る文法選択・翻訳テストと産出レベル測定する短文完成テストに分けて）、③インタビュー、④中国で出版されている日本語教科書の調査、という四つの研究方法で三つの課題を検討した。

中日視点の差異、とりわけ受身の出現位置と視点との関係（課題１）に関して、日本語中国語双方向の小説から1411対の対訳データを収集し、受身表現の使用について日中の訳語の比較を行った。両言語で受身形を使うものをタイプ１（日本語〇中国語〇）とし、日本語では受身を使うが中国語で使わないものをタイプ2（日本語〇中国語×）、中国語でのみ受身を使うものをタイプ3（日本語×中国語〇）とし、3種類に分けて分析を行った（第4章）。

学習者がどのように理解され、どのように産出されているか（課題2）を解明するために、質問紙による文法テスト（文法選択・翻訳テストと短文完成テストから構成されている）とインタビューの二つの調査を実施し、141人分の質問紙回答データを収集した。質問紙の回答理由と判断基準に関して、調査協力者5名を対象に、インタビューを行った（6章）。

質問紙の回答に見られた中間言語的な表現は、中国での現行の日本語教科書における受身文の導入方法と、どのような関わりがあるか、視点の観点からどのように工夫できるか（課題3）に関して、最近（2005年～2015年）中国で出版された大学生向けの日本語教科書5種類計18冊を対象にして、受身文の提示方法、提示内容、視点との関わりについて整理し、考察を加えた（第7章）。

3.　調査結果と考察

本研究を通して、明らかになったことを上述した課題の順にまとめる。

まず、日本語中国語双方向の小説から収集したデータの分析に基づいて、受身の出現位置と視点との関わりに関して、以下の2点が明らかになった。

(1) タイプ１、タイプ2、タイプ3それぞれのデータ数の整理から、日本語の受身文の使用範囲は中国より広い傾向にある、という先行研究（森田2002、王2009等）での指摘を裏付けていると言えるだろう。中国語の表現の方は動作主あるいは変化の主体を主語の位置に立てて、完全文で単独に事実を記述する傾向がある。日本語の方は文脈の情報に依存して、受身文の使用、とりわけ連用修飾節に出現した受身の使用により、視点が統一される傾向が窺われた。

(2) 日本語中国語双方向の小説の対訳データの調査から、使用率の多い日本語の受身の出現位置は順に、連用修飾節、連体修飾節、複文末、単文末、引用節、疑問節となっていることが分かった。双方向の対訳データには上述した使用傾向が見られた。連用修飾節に出現した受身は今回の調査データの全体の4割ぐらいを占めたが、これは前田（2011）の調査結果とほぼ一致している。受身が従属節と主節の視点を一貫させる役割が連用修飾節の述語になることを示していると考えられる。

そして、質問紙の回答から見られた学習者の中間言語的な表現の出現要因に関しては、以下の4点が明らかになった。

(1) 理解レベルでの日本語の受身形の習得が完璧でない場合に、中国人学習者が日本語の受身文を習得していく際に、母語である中国語から影響を受けているというより、日本語の言語内知識が不十分であること、具体的に、文脈依存性の高い日本語受身文を使いこなすために必要な知識とされている視点の捉え方、視点の統一が習得されていないこと根本的な原因の一つであると言えそうである。インタビューの結果を組み合わせて考察した結果、学習者が、理解レベルと産出レベルそれぞれのテストで正しく回答できても、必ずしも視点と受身文使用との関わりを正確に理解できているとは限らないことも明らかになった。院生レベルになっても視点の統一が習得できていない事例も見受けられた。さらに、受身文の使用による視点の統一と既述した内容の省略と混同している回答も見受けられた。

(2) 文法選択テストの中国語訳の回答から、母語である中国語で日本語の設問文で述べている事例を正確に理解できても、必ずしも文法選択テストで正しく選択できるとは限らないことが示された。中国語は事実志向が強い言語であるとされているが、中国人の日本語学習者にとって、それなりの主語の立て方あるいは視点の捉え方が生じやすいと考えられる。中国語の視点の概念から影響を受けて、中国語の受身表現に関する基礎的な文法知識がないまま母語（中国語）に翻訳しながら、日本語の動詞が受身にできるかどうか、さらに受身文を使用すべきかどうか、ということを判断する傾向が見受けられた。

(3) 連用修飾節に出現した受身の使用による視点の統一、単文末に出現した受身、連体修飾節に出現した受身の使用による視点の捉え方に関しては、文法選択テストで正しく選択できても、必ずしも視点の角度から日本語の受身文を習得できているとはいえないことがインタビュー調査からも明らかになった。日本語は「視点優位」の言語で、客観事実をどう捉えるか、どのような影響が自分にあったかという観点から述べる表現に重点を置いている話者中心の言語であると思われる。それに対し、中国語は事実志向が強い言語とされていて、意味的に客観的な事実・現実的結果を述べることに重点を置いているとされる。学習者は、日本語の受身文を習得する際に、日中両言語の差異に影響を受けている可能性がある。

(4) 短文完成テストの回答から、活用ミス、ヴォイスの選択、文脈情報への配慮の不十分等の中間言語的な回答が見受けられた。活用ミスに関して受身の活用規則と使役受身の活用規則を混同している傾向が認められた。また、場面依存性の高い日本語の受身文を習得する際に、文脈情報を読み取りながら受身使用を判断することが困難ではないかと考えている。日本語では、話者が行為者であるときには能動文、行為の受け手であるときには受身文が使われやすい傾向にある。しかし、中国語ではそのような視点の制約を受けないため、必ずしも話者を主語の位置に立てて事態を述べるとは限らない。その場合、動作主あるいは変化の主体を主語にして把握するほうがより理解しやすいと考えられる。それは、複数の登場人物を立てて事態を述べる傾向があることは上述したことの現れであろう。さらに、

それは、視点の統一が習得されにくい根本的な原因の一つかもしれない。

また、質問紙調査で見られた中間言語的な表現は、中国での現行の日本語教科書の受身導入方法と視点とのつながりに関して、以下の4点が明らかになった。

（1）日本語の受身文の提示に関しては、すべての文型と用法を、初級の後半で一括して体系的に導入する傾向が強い。

（2）例文の提示に関して、単文末に出現した受身の例文数が最も多いが、場面や登場人物などの文脈情報の補足説明が少ない。使用された例文の文体も書き言葉の例は圧倒的に多い。会話文を積極的に取り入れる教科書は『新総合日本語基礎日語』にしか見受けられなかった。

（3）提示内容に関して、受身文の解説の部分で視点が言及されている教科書は、『総合日語』しか見当たらなかった。連用修飾節に出現した受身の例が提示されているにもかかわらず、受身文の使用による視点の統一規則に関する解説は教科書にも記載されていない。ほかの出現位置からみた視点の捉え方と視点の置かれやすさの階層の内容に言及されていない。

（4）解釈の仕方に関して、能動文との対応性の角度からの解説、誤用分析あるいは中間言語分析の角度からの解説があったが、日中両言語の視点の相違をめぐる説明は見受けられなかった。

4.　日本語教育への提言と今後の課題

上述した調査結果とその考察に基づいて、今後の中国人学習者を対象とする日本語の受身文の指導に関して、次のような提言を行いたい。

従来の一括して導入されてきた日本語の受身文を解体し、理解レベルと産出レベルに分けて、学習段階別に、解釈を行うことを主張したい。具体的に、初級後半では、単文末（文脈なし）、単文末（文脈あり）出現した受身を教え、最初の導入で日本語の話者中心の視点的な特徴を伝える。中級段階では、連用修飾節、連体修飾節、複文末に出現した受身の例文を提示しながら、視点の統一、中日視点の差異（主語の立て方）、視点の置かれやすさの階層等の学習内容を学習者に提供する。引用節、疑問節に関しては、理解レベルでの習得を目指すことにし、使いこなせるようにするのは上級に回すことを提案したい。

視点概念の差異をめぐる日中比較対照、受身の出現位置と視点との関わり、〈被影響〉という受身の意味的な内実、受身文に潜んでいる日本語文法的発想を考慮に入れて、自然な日本語指導の立場から、視点に着目した、中国人日本語学習者向けの、文脈依存性の高い受身文の指導の仕方を工夫する必要があると考えている。

最後に、視点に着目した日本語の受身文に関する指導上の留意点をさらに深く議論するためには、「場所の言語学」理論（岡2013）を視野に入れた考察、大規模なコーパスによる受身出現位置に関する詳細な検証を行う必要があると考えているが、それに関しては、今後の課題とする。

様式7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　李　偉　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教授	眞嶋　潤子
	副 査　教授	古川　裕
	副 査　教授	筒井　佐代
	副 査　准教授	山川　太
	副 査　准教授	小森　万里

論文審査の結果の要旨

本論文は、中国語を母語とする中・上級日本語学習者にとって、習得困難な項目の１つである「受身文」について、日本語学と中国語学、ならびに日本語教育学の先行研究を踏まえた上で、「視点」の置き方という角度から、両言語における使用実態の比較、日本語学習者の文法性判断テストとインタビュー・データからの考察、そして中国で出版された日本語教科書の分析を基にして日本語教育現場への提案を導き出した労作であり大作である。

日本語学習者は「受身文」を文法的には作れるようになっても、どのような文脈で使用すれば良いのかわからず、視点を統一するために使うべき文脈で使えずに不自然な能動文を使ってしまうことがよく見られる。

「受身形」の研究というのは、日中両言語学の分野でも、日本語教育学の分野でも、夥しい先行研究のある分野で、新しいことが言いにくいと思われがちであるが、本研究では、視点に着目することで、文脈依存性の高い日本語の受身文が、中国語母語話者である学習者にどのように習得困難であるのかを、日中両言語の受身形使用実態を踏まえた上で、具体的に明らかにし、何をいつどのように指導すれば良いのか、日本語教育への貢献を目指した研究である。

日中両言語における使用実態の調査、学習者の習得状況、そして日本語教科書での扱い、という３つの面での研究課題に取り組むために、以下のような研究方法が取られ、新たな知見が得られた。

（１）日中双方向の対訳データの比較調査：原作が中国語の小説の和訳（『神なるオオカミ』）と、原作が日本語の小説（『ノルウェーの森』）の中国語訳を例に、受身表現が一言語以上で使われている1400件以上の対をデータとし、受身形を両言語で使う「タイプ１」、日本語でのみ使う「タイプ２」、中国語のみで使う「タイプ３」に分けて分析した。その結果、受身文の使用範囲は中国語よりも日本語の方が広いことが明らかになり、多くの先行研究を支持した。また日本語での受身文は、単文よりも連用修飾語に使われて視点の統一が図られていること、受身の出現位置が、多い順に連用修飾節、連体修飾節、複文末、単文末、引用節、疑問節であることが示された。これは先行研究を越えた知見である。さらに、日本語と中国語の差異についても、多々興味深い議論が展開されている。

（２）中国の２つの重点大学の学習者140名以上の協力を得て、文法選択・翻訳テストと短文完成テストを行い、学習者が受身文をどのように理解し、産出しているのかの調査を行っている。その上で、フォローアップ・インタビューを行って、回答理由と判断基準に関する学習者の生の声を調査している。ここからは、上級学習者、大学院生に至っても「視点」を意識していないために理解ができていない様子が窺われるなど、日本語教育の指導法への改善点が浮き彫りにされている。

（３）（２）の調査で見られた学習者の中間言語は、中国で使われている日本語教科書の導入方法に関連することを探り、視点の統一と言う面から改善策を提案するため、2005年以降に出版された日本語教科書18冊を分析している。その結果、文脈情報を与えているものが少なく、1冊を除いて「視点」に関する言及がないことがわかり、今後の導入や指導の改善のための課題が明らかにされた。

本論文は、申請者が中国の大学で日本語教育に携わってきた経験と、中国の大学の日本語教育現場

の改革を目指し、日本語教育学への貢献を強く志した労作であるが、貢献できるのは中国語教育の分野にも及ぶことが指摘できる。本文と稿末資料を合わせて400ページになる大作であり、細部まで丁寧に説明しようとする日本語も流暢であり、説明がやや冗長で読みやすいとは言い難い部分もあるが、地道で粘り強い申請者の日々の研鑽の賜物である。

審査委員会では、本研究の学術的価値と共に、日本語教育現場への示唆や貢献を評価し、今後のさらなる研究の発展性も認められるので、本論文を本学の博士号授与に十分値するものであると、全員一致で結論付けた。